

「平家物語享受史年表<sub>中世</sub>」追補

福田秀一

さきに私は、「平家物語享受史年表<sub>中世</sub>」（国語国文学研究史大成『平家物語』）を作成して大方の利用と批判を望んだが、もと／＼あのやうな作業は、個人の力で、しかも短時日では、多くの遺漏があり得べきものであつた。その点、今後も御教示を切望するが、現在までに気づいたもの若干を左にまとめて記しておく。体裁等はほど前回は做つた。この中「蕉堅稿」の記事（永徳二）は安良岡康作氏の御示教によるもの、「言経卿記」（天正十四・五年）は刊本第二冊が当時未刊で拾へず、その後刊行されてメモしておいたものであるが、笠柴治氏からもいくつかを御教示頂いたし、最近小川要一氏も、その中で並河入道の名の出る部分を取り上げてをられる（「或る疑問——並河入道をめぐつて」、『解釈』昭三五・一二）。その他の記事は、前回カードを原稿に写す時に落してゐたもので、校了実際に気づいたため、間に合はなかつたものである。

永徳二

夏

〔絶海中津、円覚寺海寿和尚に下の書を送る〕旬日前、嘗訪府中老居士。時有金座頭。袖出教帖、便折封對老居士、琅琅一讀。此老素欽道風、慨然增恨值遇之晚耳。城金天資妙於演史。招來林下、涼月清宵、聽歌數闕。清雅之音、令人一洗耳根。蒙諭應言細語歸第一義者、良有旨哉。何其受賜之多耶。感媿感媿。（蕉堅稿、書）

嘉吉三

正

23 十種茶俄張行、人数、宰相入道・源三位・新三位・持経朝臣・有俊朝臣・重賢朝臣・即成院・前法輪院參賀之間人・永親・経秀侯。〔中略〕一献及酒盛。法輪院平家語。初聽聞。頗如當道、有其興。深更事了。（看聞御記）

二・25 林光院主脩山來話次、及射狗事。山

曰、鳥羽院御宇、息有有美女、不知所出。名曰玉藻前。然為帝所寵。能知天竺唐土之事言之。爾後帝不豫。卜之則此女使然也。

遂禱之。女變成狐逃去。此狐在下野州那須野中。將馭之。然捷疾不可捕得。先命武士騎馬射狗、以習射狗。然后上總介者射而殺之。尾有双針。上總與之賴朝。賴朝得之、

遂定天下。上總介亦源家之士也。凡今射狗、本於此云。又曰、此狐乃周婆娑所化也。(臥雲日件録)

閏六・12 當院平家屏風為御覽被召寄也。御

末永阿弥奉之。屏風被御覽而被返也。(蔭涼軒日録)

三・9 水田妻小少將來、平家アツラへ了、

四・五・七・九・十一卷也。(言経卿記)

四・2 水田小少將ヨリ便宜有之、平家出來候ハ、一冊所望之間、出來之分四・五・七卷遣了。(同)

五 水田小少將來、平家四卷カナニ付テ、所望由申來了。(同) 五・29 並河掃部入道ヨリ可參會之由、菊屋樵齋ト

並河掃部入道ヨリ可參會之由、菊屋樵齋ト被申間、則令同道罷向。始而對顔也。先

茶湯有之。次奥ノ座敷ニテ喰有之。次平家物語所々不審之由被申間、少々申了。(同)

30 並河入道寄庵昨日礼ニ、樵齋同道ニテ

入來了。勸盃了。(同) 六・6 並河入道寄庵へ罷向了。菊屋樵齋同罷向了。平家物語一卷入道讀之。不審条々相問了。サウメン・喰有之。(同) 14 並河入道寄庵へ罷向了。サウメン有之一盞。平家物語二卷問之。

不審相尋之間相問(答カ)了。(同) 26 並河入道寄庵へ罷向了。此間二三度使有之間如此。平家物語三卷讀之。不審相問之間答了之。(同) (並河入道寄庵ノコト、七月

三・六日、八月廿・卅日ニモ見ユ) 九・3 並河入道寄庵へ罷向。平家四卷問之。不審相問之間答之。帰宅已後生エソ一折送之。

(同) 11 並河入道へ阿茶丸令同道罷向。平家五問之。少々不審相問之間答之。粟粉一盞有之。(同) (並河入道寄庵ノコト、十月十五日ニモ見ユ) 十・21 九条禪閣(兼

孝)梅庵(大村由己)へ御出也。然者可來之由使有之、罷向了。宇喜多安津法印(忠家)御礼被申入了。座頭城俊禪閣御供也。

其外善五郎(白江正善)同罷向了。先桐壺卷御講尺也。夜前初ヲ被講云々。次夕喰有之。次和連連句八句有之。亥刻ニ御帰之間、

御供申了。帰宅了。今日一興如此、松風や

なびく宮のゆふしぐれ 玖 九条殿 雲寒  
 月上都〔カ〕 由己 望山斜鷹落 予 小舟やす  
 らふ秋の江の水 安津 村くにつゞける  
 蘆のほのかにて 城俊〔後略〕 22 九条殿  
 禪閣御旅宿へ参了。芳春軒〔覚源〕・由己  
 外記入道道白・座頭了一等同参了。〔同〕  
 23 九条殿禪閣下間侍従〔頼純〕所へ御出  
 也。然者芳春軒ヨリ書状有之、侍従ヨリ予  
 ニ可来之由有之間、則罷向。墨五丁遣了。  
 勾當城俊モ同参了。先松風巻端禪閣御講談。  
 次風呂、次夕喰、次一折連哥。入夜葛・吸  
 物・御酒了〔有之カ〕。子刻ニ御帰了。則  
 御供帰宅了。〔後略〕〔同〕 25 九条殿禪  
 閣宇喜多入道安津所へ被申入之。予・楠入  
 道長詣・由己・勾當城俊等御供也。先朝喰、  
 次箸木卷十余丁被講之。次サウメン、次吸  
 物・一盞。次御當座一番ツ、次予・法橋  
 一、次夕喰、次吸物及数盃了。亥刻ニ帰  
 宅了。〔後略〕〔同〕 30 並河入道寄庵ヨ  
 リ使者有之、阿茶丸同道罷向了、平家六讀  
 之、聞之。不審問之。夕喰有之。〔同〕 11  
 ・16 並河寄庵へ阿茶同道罷向了。夕  
 喰有之。平家物語七卷聞之。不審之間、少  
 々返答了〔同〕 十二・8 並河入道寄庵

天正十五

ヨリ使者有之、則罷向了。城俊勾當同罷向。  
 平家十卷聞之、不審等問答了。ゼンザイ餅  
 一盞有之。双瓶遣了。後刻並河双瓶札ニ来  
 了。〔同〕 18 西御方〔興正院佐超室〕ニ  
 平家物語十二卷全部借用申了。〔同〕 20 善  
 五郎へ罷向。暮々也。城俊勾當罷向。吸物  
 モチ・一盞有之。亥刻ニ帰宅了。〔同〕 22  
 西御方へ談合少有之間罷向。夕喰有之。  
 薄暮ニ興門様見参也。酒有之。城俊・梅一  
 等同参了。亥下刻帰宅了。〔同〕 23 西御  
 方へ平家物語一卷ヨリ六卷マデ返上了。〔同〕  
 27 並河へ罷向。讃州へ陣ニ罷向云々。〔後  
 略、冷泉為滿、並河入道ノ女ヲ娶ルコト、  
 天正十五年九月五日ノ条ニ見ユ〕 28 西  
 御方へ平家七之巻ヨリ十二マデ全部之分返  
 上了。〔同〕  
 正・7 城俊勾當札ニ来云々。〔同〕 三・25  
 天神社へ参詣了。次金藏坊ニテ連哥會有之、  
 善五郎迎ニ来了。巳刻ニ罷向。人数、予・  
 弘閑〔北野社〕・堯海〔同〕・朝盛〔金藏坊〕・良三・  
 狼云・玄尋・正善善五郎・道加・安一座頭  
 等也。白粥有之。申刻ニ帰宅了。〔同〕 四  
 ・1 庚申待之間、申刻ヨリ連哥有之。  
 〔中略〕人数、予・冷〔冷泉為滿〕・四〔四

条隆昌〕・寿江〔白江〕・正善〔同〕等也。  
 金藏坊〔朝盛〕ハ俄ニ故障了。入夜興門座  
 頭梅一來。會已後平家上〔浄〕るり等三線サミゼ  
 等引之。寅刻ニ帰宅了。會ハ亥刻マデ也。  
 〔後略〕(同) 六・一 座頭梅一礼ニ来云  
 々。(同) 八・13 西御方ヘ可来之由有之、  
 則罷向。サウメン有之。ナシ木殿母儀・北  
 御方御内中殿・城俊等相伴了。(後略)(同)  
 22 城俊勾當詠草談合来了。(同) 26 九条  
 禅閣〔兼孝〕早朝ニ御下向也。〔中略〕梅庵  
 〔由己〕・座頭城俊等参。御雜談有之。(同)  
 27 九条禅閣ヲ梅庵ヘ被申入了。則御供早  
 朝ヨリ也。朝食已後閑斎・夢梅〔易林〕・  
 城俊等参向、和漢連句五十韵有之。終夕ニ  
 御帰了。御供申也。(後略)(同) 28 九条  
 禅閣御滞留也。閑斎・夢梅等参。御雜談有  
 之。城俊同来了。後刻閑斎又来了。〔中略〕  
 九条禅閣入夜城俊勾當申入之間、則御出也。  
 予亦御供也。次西御方ヘ参了。又城俊ヘ罷  
 向了。田楽・一盞有之。連哥一折有之、如  
 此。ちぎりきや末も八千世の秋の友 九条  
 殿、ながれをうくる菊の下水 城俊〔後略〕  
 十一・2 梅一來。勸酒了。(同) 5 城  
 俊勾當丁香散一服ツ、二度遣了。座頭衆

六人有之、種々狂言了。(同) 13 城俊勾  
 當所勞間立寄了。驗氣也云々。診脉了。(同)  
 14 城俊・梅一带来了。(同) 21 早朝ニ  
 城俊来。診脉了。丁香散一服令飲了。次四  
 物湯ニ沉香・人參・黄耆等加之ニ包遣了。  
 (同) 〔城俊、言経ヲ訪ヒ、診脉、投薬ヲ  
 受クルコト、廿二・廿三・廿四・廿五・廿  
 七・卅日ノ条ニモ見ユ〕 23 城俊所ニテ  
 俄ニ連哥四十四句有之。人数三人。夕食有  
 之。西下刻帰宅了。霜の後又色ふかし松の  
 雪 予、月は真砂にさむき明がた 城俊  
 〔後略〕(同) 30 西御方〔興正院佐超  
 室〕平家一之巻讀之。城俊・梅一等参了。  
 夕食有之。(同) 十二・1 城俊礼ニ来。  
 砂糖持来了。勸酒了。(同) 〔城俊、言経  
 ノ診脉・投薬ヲ受クルコト、二・三・五・  
 八・九・十・十三・十四・十五・十七・  
 十九・廿一・廿三・廿五・廿七・廿九ノ条  
 ニモ見ユ〕 2 西御方ヘ罷向。連哥一  
 折、次當座一首ツ、有之。うつし繪もえや  
 は及ばん雪の松 予、すだれをまけばさむ  
 き梅が香 城俊、鶯の春をしらせる聲はし  
 て 梅一、三吟也、已下不及記之。〔後  
 略〕(同) 3 西御方御内ヤドリ木所

勞、茶調散五包遣了。陣一梅一同人也。草撥  
圓一貝遣了。内々所望也。(同) 7 西御  
方へ罷向了。御酒有之。(中略) 陣一草  
撥圓一貝遣了。(後略) (同) 22 城俊  
ミソ・紙一束持來了。(同)